

《楽曲解説》

解説＝野本由紀夫

- 2/25 第99回東京オペラシティ定期シリーズ
- 2/26 第874回サントリー定期シリーズ
- 2/28 第875回オーチャード定期演奏会

今日でこそ「作曲家」というイメージだが、マーラー(1860-1911)は生きていたとき、ウィーン・フィルやウィーン宮廷歌劇場音楽監督となったほどの、超一流指揮者だった。

そんな彼だが、コンサートではモーツァルト(1756-1791)のピアノ協奏曲を一度も振らなかつた。もっとも、マーラーは歌劇場指揮者だったから、『フィガロの結婚』は振っている。その『フィガ

ロ』作曲中に書かれた傑作が、ピアノ協奏曲第23番である。

マーラーとモーツァルト。100歳ちょっと違いの、しかも「ウィーン」を本拠地として活躍した両者の作品が本日のプログラムだ。チャイコフスキー国際コンクールで第2位に入賞したピアノの名手の弾き振り、そしてやはり歌劇場のシェフでもあったチョン・ミョンフンの指揮で、どうぞお楽しみに。

(その分、オーボエが省かれる)。ティンパニとトランペットなしの、比較的小じんまりしたオーケストラ編成も、ピアノ付きの「室内楽」的な親密さを生み出している。

もう一つの魅力が、簡明で見通しの良い楽曲形式でありながら、細部までモーツァルトが作曲しつくしている点だ。象徴的なのは、独奏ピアニスト任せのことが多いカデンツァ(ソリストが即興演奏で腕前を披露する楽曲部分)まで、モーツァルト自身がしっかりと作曲していることだ。とても耳馴染む音楽でありながら、緻密に作り上げている点がすばらしい。

第1楽章 アレグロ まずはオーケストラで、次いでピアノでも呈示部が出てくる、典型的な「協奏曲ソナタ形式」の楽章。楽章の最後に出てくる、モーツァルト自身が作曲したカデンツァは、30小節と

いう比較的短いものだが、第1楽章のなかに出てきた重要なモチーフを用い、かつ華麗な効果も上げていて、大きな聴きどころだ。

第2楽章 アダージョ あまりにも名高い、メランコリックな嬰へ短調のアダージョ楽章。8分の6拍子の「ターンタタ・ターンタタ」というリズムは、シチリアーノ(舟歌)のリズムとして知られる。クラリネットはもとより、ファゴットとフルートの掛け合いもお聴き逃しなく。

第3楽章 アレグレット 陽気で楽天的なロンド楽章である。鍵盤を駆け回るようなピアノ独奏が、オーケストラと競演や協演を繰り返す。最後は、オーケストラの盛り上がりとともに終わる。

[楽器編成] フルート、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部、独奏ピアノ



2015年5月長岡市立劇場での演奏より ©hiro.inoue

モーツァルト(1756-1791) ピアノ協奏曲第23番 イ長調 K.488

- 第1楽章 アレグロ(約11分)
- 第2楽章 アダージョ(約7分)
- 第3楽章 アレグレット(約8分)

第23番は、モーツァルトがオペラ『フィガロの結婚』を作曲していた1786年春(30歳)に完成したピアノ協奏曲である。同時期に完成した、ひとつあとの第24番K.491がハ短調で、暗くて激情的なのに対し、この第23番はいかにも楽天的で親しみやすい。実際、1800年の楽譜出版以来、彼のピアノ協奏曲のなかで

も、とりわけ人気の高い一曲となった。

自筆の作品目録には「1786年3月2日、ウィーンで」完成とある。おそらくこの年の四旬節の演奏会(3月)のために作曲したのだろう。もっとも、モーツァルト研究で世界的に有名なニール・ザスローによれば、第1楽章だけは、その2年ほど前に着手された可能性もあるという。

この協奏曲のひとつの魅力は、クラリネットではないだろうか。『フィガロ』でもそうだが、クラリネットは晩年のモーツァルトの「音色」と言っても過言ではない

オペラシティ
2/25

サントリー
2/26

オーチャード
2/28

マーラー (1860-1911)

交響曲第5番 嬰ハ短調

第I部

第1楽章〈葬送行進曲〉正確な速さで。厳粛に。葬列のように(約12分)

第2楽章 嵐のように荒々しく動きをもって。最大の激烈さをもって(約15分)

第II部

第3楽章〈スケルツォ〉力強く、速すぎずに(約17分)

第III部

第4楽章〈アダージェット〉非常に遅く(約9分)

第5楽章〈ロンド・フィナーレ〉快速に、楽しげに(約15分)

マーラー (1860-1911)にとっても、世紀にとっても、まさに「転換期」に生まれた交響曲。マーラーが20世紀に書いた、最初の交響曲でもある。

人生の転機(1)——ウィーン・フィル辞任

この交響曲の作曲に着手した1901年は、40歳のマーラーにとって人生の転機だった。まずは、仕事上の転機である。いまでこそマーラーは作曲家扱いだが、本職はウィーン宮廷歌劇場の総監督である。彼はウィーン・フィルの首席指揮者も兼務しており、世界的な超一流指揮者だった。

流指揮者だった。

多いと年間100回を超える本番があり、かなりハード。健康を害するの無理はない。とうとう1901年3月には、もともと悪かった痔から命にかかわるほどの大出血を起こし、3回目の手術を受けた。

ところがマーラーが倒れて、オーケストラも批評家も喜んだ。マーラーはユダヤ人だったので、保守的なウィーンではそもそも風当たりが強かったのだ。彼はこうした状況に嫌気が差し、とうとうウィーン・フィルを辞任した。

人生の転機(2)——アルマとの出会い

それでも宮廷歌劇場の監督は辞めなかった。その仕事の合間を縫って交響曲第5番のスケッチをはじめたが、同年11月10日の日曜日、マーラーは運命の出会いを果たす。アルマ・シントラー (1879-1964)と知り合ったのだ。アルマは22歳、マーラーは41歳だった。

アルマには当時、好きな人がいた。ツェムリンスキー (1871-1942)である。のちにシェーンベルク (1874-1951)の師となったことでも知られる、作曲家で指揮者だった人物だ。

しかし、マーラーと出会うと、お互い一目惚れ。そのわずか一か月後の12月に



アルマ・マーラー

は婚約、翌年3月9日に電撃結婚した。世界的指揮者と美貌の才女との結婚は、スキャンダルであった。

マーラーと親交のあった指揮者メンゲルベルク (1871-1951)によれば、あの切なく美しい第4楽章〈アダージェット〉は、「マーラーの、アルマにあてた愛の証」だという。楽譜の清書をしたのも、アルマであった。

交響曲第5番——

新しいマーラーのはじまり

この交響曲は、アルマが1960年にラジオのインタビューで語ったように、「新しいマーラーのはじまり」となった。交響曲第2番から第4番までの3曲が、歌曲集『子供の不思議な角笛』に起源をもつ「声楽付き」交響曲であったのに対し、第5番から第7番の3曲は、「純粹器楽」の交響曲だ。第5番も、とくには文学的なプログラムをもっておらず、自作歌曲ともほとんど関係ない。

既存の形式図式は換骨奪胎。むしろ、そこが「新しい」。そのため、この交響曲はひどく支離滅裂な印象を与えたり、雑多な性格が無統一に混在しているかのように、聴き手を困惑させたりする。大きく見れば、「葬送」から「勝利」への流れがあるが、ベートーヴェンの「苦悩から勝利へ」とはずいぶん面持ちが異なり、パロディといってもよいだろう。

第I部

第1楽章〈葬送行進曲〉 次の第2楽章への、長大な「序奏部」の機能を果たす楽章。荘重な葬送行進曲であり、冒頭のトランペット・ソロではじまる行進曲主部(A)と、突然 *ff* となって、「激情的に、荒れ狂って」と指示された中間部(トリオ、B)が交互に現れる。図式にすると、A—B—A(—コーダ)となる。

第2楽章 ソナタ形式の楽章。戦闘的な音楽ではじまる。アルマによれば「マーラーの自我と世界との激しい戦い」だという。再現部を経て、突然、二長調の金管コーラルが出現するが、ここはまだ束の間の勝利にすぎず、本当の勝利は最後の楽章までお預けとなる。荒れ狂った音楽も、最後は虚無的な余韻を残して、ティンパニの1音だけで閉じられる。

第II部

第3楽章〈スケルツォ〉 ソナタ形式

の要素も合わせもったスケルツォ楽章。また、ホルン協奏曲と呼びたくなるほど、ホルンのソロが活躍する。「タタ・タン・タン | ター・タ・タン」のリズムが、どんどん音楽にはめ込まれていく。これがカノンで出てくる箇所は、クラリネット奏者が次々と鎌首を持ち上げるように「ベル・アップ」するので、ステージにご注目。

最後は一種の「死の舞踏」。一大クライマックスが築かれる。

第III部

第4楽章〈アダージェット〉 切ないまでに甘美で、天国的な美しさに満ちた緩徐楽章。マーラーが新妻アルマに捧げた愛の楽章である。ハープと弦楽器群のみで奏される。ヴィスコンティ監督が映画『ヴェニスに死す』（1971）のBGMとして用いて、大ブレイクした。

第5楽章〈ロンド・フィナーレ〉 ロンドと題されているが、ソナタ形式化した楽章である。フーガが6回も挿入されていて、マーラーのバッハ体験が如実に感じ取れる。

まず序奏で、これから展開されていくモチーフが、まるで登場人物の紹介のように、ひとつずつ呈示される。

ホルン合奏ではじまるロンド主題は、「陽気なアレグロで、新鮮に」とあり、牧歌的な響きが特徴。第1フーガはチェロに導かれてはじまる。低弦がフーガ主題を力奏し、ホルンが合いの手を入れるのが第2フーガ。

展開部は、最弱音の静寂な世界である。ひきつづき、低弦から第3フーガがはじまる。第4楽章の中間部の早回しのような箇所を経て、第4フーガはヴァイオリンから。一大クライマックスが形成されると、テンポが急に重くなって、再現部を迎える。

第5フーガは また低弦の力奏から。いったん音楽が収まると、第6フーガは最弱音でホルンを対旋律にはじまるが、追い込むようにして金管のコラールが登場。ついに勝利の喜びが圧倒的に鳴り響く。

最後は意表を突いた転調を見せながら、力強く終わる。

[楽器編成] フルート4(ピッコロ2持ち替え)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット3(Es(Es)クラリネット、バスクラリネット持ち替え)、ファゴット3(コントラファゴット持ち替え)、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、大太鼓、シンバルを固定した大太鼓、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、タムタム、ホルツクラッパー、ハープ、弦楽5部

のもと・ゆきお(音楽学)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授、オーケストラ指揮者。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同「ららら♪クラシック」のららら委員長、同Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員。「題名のない音楽会」ほかにも出演。このたび『クラシック名曲のワケ』（音楽之友社）を上梓。